

編集後記

▼県下公立高校教育の激変はこの十数年間の時をへて巨視的に整理すると理解できます。

高校の校種が普通、専門、総合の三つに増え、産業界、高齢化社会にあわせた学科も数多く新設されました。更にそれらの学科も五年後の新指導要領が実施されると同じ学科を選択するにも、難易度によって分けられていて、どちらを選ぶかは本人次第となります。

入試方法も高校の数ほどふえました。学区選択の多様化もこれから推進されます。学力格差是正問題を脇に置いておいて「あなたの興味・関心に合わせ、また自分の個性・適性にあわせて、それなりの高校を自由に選べます」ということによります。

▼このような文部省の「改革」の方針は具教委と現場の教師の裁量をこえて始まりました。明治以来かわらぬ中央集権的展開です。この与えられた矛盾に満ちた困難な条件の中で教師が奮闘し、子どもたちがけなげに頑張っていることをいろいろの校種の先生方の報告か

ら汲み取っていただけたでしょうか。

▼故伊藤肇君の死をめぐっての裁判がはじまりました。彼の死から今日にいたるまで、彼と同様の道を選んだ子どもたちの資料も載せました。この子どもたちの死を日本の学校教育のありかたの問題として裁判官がうけとめてほしいと願っています。

▼「春をまつ、寮雪の津南」を語っていただいていの中で中沢さんが「季節感の乏しい七年度の東京生活があったから、故郷で自然の美しさを再発見できたともいえる」といいました。東京でなくても新潟の地で、せかせかと暮らさざるをえない私たちは、四季の移り変わりを豊かにとらえる感性をどんどん鈍化させ、人へのやさしさも失っていないかと気になります。

▼八木氏のカリフォルニアでの医療体験をおもしろく読みました。お金がある無いで決定的に診療内容に差が出るころもそうですが、それよりも医療水準は本来最低でもこれぐらいの患者への配慮がはらわれてしかるべきだということが見えたからです。日本の医療体制が医師・看護婦その他のスタッフなど人員不足や業務の過重さでもひどすぎ、そのこと

が患者へのしわよせになるようです。

▼「教師がかがやくとき」を中野氏に二回にかけて書いていただきます。会員のみなさんからも「私の心に残った〇〇先生の一言」を書いてほしいのです。それが教師への信頼回復の服の清涼剤になればと願っています。(本田)

にいがたの教育情報 NO. 57

1999年3月31日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明
〒951-8116 新潟市東中通1-86 山崎ビル
電話・FAX (025) 228-2924
振替口座・00640-0-12332
印刷所・中央印刷さびす



本誌内容の無断転載を禁じます。